

笹沢左保



桃源社版
ポピュラー
ブックス

著者の了解により検印廃止

昭和38年7月25日 発行

真昼に別れる
のはいや

著作者 笹 沢 左 保

発行者 矢 貴 東 司

印刷者 小 泉 輝 章

〒 270,

発行所 株式会社 桃 源 社

東京都中央区日本橋蛸薬町1-12

電話 (671) 4001~2番

振 替 東 京 64351 番

落丁・乱丁の節はお取替え致します

1963 ©

目次

I	憂慮	五
II	手袋がない	四〇
III	三角の関係	一三〇
IV	動機崩し	一六九
V	毒盃	二四九

装
幀
永
田
力

真昼に別れるのはいや

憂　　慮

1

ブザーが鳴った。

新倉多美子はミシンをとめて立ち上った。気がついてみると、もう黄昏れであつた。アパートのこの小さな部屋にも、靄もやに似た夕闇が漂っている。窓から見下せる赤坂界隈の街並に、バラ撒いたような灯がつき始めていた。

兄だな、と多美子は思った。ブザーの鳴り方でも分かるし、兄が帰ってくる時刻でもあつた。

多美子は台所へ出た。リノリュウムが足袋の裏にひんやりと冷たい。梅雨時特有の湿しめった空気が濃よどんでいた。ドアは台所についている。多美子はたたきに乗り出して、ドアの掛け金はずした。

「お帰りなさい……」

ドアを押しあけると、男のズボンと靴が見えた。やっぱり春彦はるひこだつた。

「定刻より早目じゃない？　御飯の仕度、大至急でやらなくちゃあ」

と言って、多美子は怪訝（けげん）そうに春彦の顔を見なおした。

春彦の口許が綻（はな）んでいる。多美子の唇が小さく開きかげんになった。軽い驚きの表情だった。

《兄が笑っている！》

この八ヶ月間、見たことのなかった春彦の笑顔である。それも作り笑いではなかった。昨日までの春彦には、陰気なトゲトゲしさが残っていたが、今の彼にはそれがない。目まで柔和に微笑していた。「お母さん、デパートへ行くって出てったけど、まだ帰ってこないのよ」

そう告げなければならぬことではなかったが、多美子は意味もなく口にした。兄の変貌（へんぼう）ぶりに戸惑ったのである。

「お客さんだ……」

春彦は多美子を見ないで言った。半ば照れているような口ぶりだった。

「あら……」

小さく叫んで、多美子は反射的に背のびしてドアの外を覗いた。兄の背後に白っぽいものを身につけた人影が佇んでいる。若い女性のようにであった。

「じゃあ……早く」

多美子は再び、訳もなく狼狽（わんぱい）した。調理台を遮蔽（しやへい）するカーテンを引き、スリッパを蹴散らかして部屋へ戻った。部屋には縫いかけの浴衣布地が散乱している。手早くそれを取り片付けて、二階へ通ずる階段の二、三段を、乾いた雑布で拭（ぬぐ）った。

「失礼致します……」

すきとおった声と一緒に、柔かい香料の匂いが部屋へ入って来た。

「さあどうぞ、取り散らかしておりますけど……」

多美子は相手の目を見ないで頭を下げた。

「多美子、紹介しておこう。藤波葉子さんだ……」

春彦が俯向いたまま言った。その足許を見て、多美子はハツとした。兄の靴下の爪先に穴があいている……。それを隠すように春彦の真ん前に立って、多美子は藤波葉子の方へ向きなおった。

「多美子です。兄がいろいろとお世話になりました……」

「こちらこそ……」

多美子は初めて相手を直視した。美人だった。顔立ちは一見して冷やかに感ずるほど、上品に整っているが、黒く燃えている大きな瞳が情熱的に見えた。臍が僅かな反りを見せて、キチンと揃っている。多美子は、すみれ草という印象を受けた。

「じゃあ二階へ……」

春彦が言った。

「お邪魔致します」

藤波葉子は多美子の脇をすり抜けるようにして、春彦に従った。七分袖の白いブラウスに淡い紫色のタイトスカートは、すぐ階段の上へ消えた。それを見送って、多美子は綺麗なスタイルをしている

なと思つた。

多美子は部屋の中央へ戻つた。天井を見上げる。勿論、二階からは何の物音も聞こえて来ない。二階が一間、階下に一間と台所、という變つた造りのアパートだから、隣り合わせの二間続きと違つて、別室の人声や物音が聞こえてくることはなかった。

《何をしたらいいのか……》

多美子は落着かなかつた。

兄が若い女性を連れて来たと知つた瞬間から、多美子は狼狽している。しかし、それは悪い意味での狼狽ではなかつた。むしろ、大きな期待がともなつた狼狽だつた。望み薄の期待が不意に実現した時のように慌てたのである。

多美子は、兄の女客を歓迎した。何とかして、充分なもてなしをしたかつた。どうしたら藤波葉子が、ここへ来たことに満足するだろうか。今後もここへ来る氣持になるだろうか。ひいては、彼女と兄が親密になることを願っているのだ。

結婚する氣のなかつた娘が初めて男性を家へ連れて来たのを、迎えた時の母親の氣持と同じであつた。

何はともあれ、お茶を入れなければ、と多美子は氣がついた。

台所へ行き、ガスに火を点けた。火を点けながら、お茶よりジュースの方が氣が利いているかも知れない、と思ひなおした。ガスの火を消して、冷蔵庫の中を覗いた。オレンジジュースが二本あつた。

その横に箱詰めのまま、生イチゴが置いてある。ああいうお嬢さんには生イチゴの方が向いている、と多美子はまた迷った。

「何をしてるの？」

草履の裏をドアの外のコンクリートにこすりつける音がして、そう声がかかった。ドアが半開きになっている。腕にかえられたデパートの包装紙の買物包みが見えた。母親の亮子だった。

「本^っ当に梅雨^ゆって嫌ね、草履がメチャメチャ……」

亮子は愚痴を呟きながら、後手にドアをしめた。まだ草履の裏を気にしている。

多美子は何となくホッとした。藤波葉子の接待を、母親に任せられるという安堵であつた。

「お母さん、ビッグニュースよ」

多美子は両掌でメガフォンを作り、息を言葉にした。

「なあに？」

「お客様よ、兄さんのところへ」

「どなた？」

「ううん、普通のお客様じゃないわ。女性、女性なのよ。それが凄い美人なの……」

「へえ。それがビッグニュースなの？」

亮子はあまり気乗りのしない様子だった。それよりも、今度は足袋の汚れを気にしている。

「お母さんって、案外冷たいのね」

多美子は頬をふくらませた。母親が話に乗って来ないのが不満だった。

「だって、多美ちゃん——」

「兄さんが、若くて綺麗な女の人を連れて来て、今二人っきりで二階にいるのよ。これがビッグニュースじゃないっていうの？」

「だからって、その女の方が春彦はるひこの恋人とは限らないでしょ」

亮子は娘の剣幕に、呆っ氣にとられたようだった。

「恋人とは行かなくても、それに近いと思うわ」

「会社の女の人かも知れないでしょ」

「そんなんじゃないって……」

多美子はおどかしそうに肩をゆすった。藤波葉子を連れてドアの前に立っていた時の兄の笑顔を、多美子は見たのである。兄の顔には、肉親だけが汲み取れる微妙な感情の表われがあった。それを多美子は「生氣せいき」と信じている。

「兄さんはね、とっても嬉しそうな顔して帰って来たのよ」

「そう……」

亮子も真剣な顔になった。もしかすると——という期待と、その反面にある不安が、母親としての彼女を緊張させたのである。

「好きな人だったらいいんだけど……。敏江が死んで四年、千秋が死んで八ヶ月になるものね。春彦

もそろそろ、過ぎ去ったことよりこれからのことを考えなくてはね」

亮子も二階の様子を窺うように、天井へ目を向けた。

「全ては時が解決してくれるって言ってたでしょ。その解決の時が来たっていうわけよ」

母娘は一緒に白い喉のどを見せて仰向あおむいた。春彦の過去は不幸だった。それだけに、その過去に訣別を告げて欲しかったのだ。

春彦は六年前、二十五歳の時に結婚した。相手は敏江という家具問屋の娘だった。だが敏江は二年後に、心臓弁膜症べんまくしょうで死んでしまった。子供は女の子が一人いた。千秋という母親似の、色白の涼しげな目をした子供であった。

春彦は敏江の死はそれほど深刻に考えなかったようである。平凡な見合結婚だったし、もともと丈夫ではなかった妻の病死だ。すぐ気持の整理はついだろう。それに千秋という生き甲斐があった。亮子も多美子もいることだし、千秋の世話を見る者に事は欠かなかった。春彦に再婚の意志はなく、まあ機会を見てということになっていた。

しかし、その千秋が去年の十一月一日、自動車事故であっけなく死んでしまったのである。これは春彦にとって、ひどい衝撃だった。

千秋は五つになったばかりの、可愛い盛りであった。その千秋が、突如としてこの世に存在しなくなったのである。家の中にはポツカリと穴があき、家族の間にも沈黙の谷間が出来てしまった。

元来が無表情だった春彦は、翳かげのある、まるでデスマスクのような顔になった。口数も少なく、目

はいつも空間を贖^{あつ}めていた。

可笑しいことを言うと、春彦が頬を引きつらせて無理に笑おうとするので、多美子は冗談を言うのもやめた。

ただ黙々と働き黙々と生きている一種の廃人——春彦がそうになってしまふのではないかと、亮子は危惧したときえあつた。

——その春彦が藤波葉子という若い女を家へ連れて来た。大袈裟に言えば、八ヶ月間も閉ざれていた扉が、今日初めて開放されたようなものだった。

会社の部下だとか、単なる知り合いの女性であれば、春彦がわざわざアパートへ伴ってくるはずはない、と多美子なりの推量はあつた。少なくとも、好意以上のものを持ち合っている者同士だと想像出来る。プロ野球に夢中の春彦が、テレビのナイター中継を犠牲にするつもりなのだ。藤波葉子に、春彦はナイター中継以上の重きを置いていることは確かだった。

「ねえ、何かうんと御馳走しましょうよ」

多美子は母親の背中に抱きついた。

「あんた、自分のことみたいにはしゃいでるのね」

亮子はよろめきながら、言葉を幾つにも区切った。

「兄さんが結婚することは、次のあたくしの結婚を予言しているってわけ」

「ずうずうしい、相手もないくせに……」

「嘘よ。何だか家の中が明るくなるような気がして、はしゃいでるのよ」

「苦しいわよ……多美ちゃん！」

亮子は息をはずませて前のめりになった。その背中におぶさる恰好になって、多美子は足をバタつかせた。亮子の襟元えりもとに顔を埋めて思いっきり母親の匂いを吸い込む。事実、もう家の中が明るくなつたような気がした。こうして母親に戯れるたわむのも久しぶりである。多美子は楽しかった。

「多美ちゃん、放して！ 二階から誰かくるわ」

亮子は多美子の脇腹を肘でこずいた。

「ああお母さん、帰っていたんですか……」

階段をおりて来たのは春彦だった。春彦は母親と妹の重なった顔を見て、眩まぶしそうな目をした。

「今すぐ、お茶を入れるわ」

亮子の背中で、多美子が言った。

「それを言いに来たんだ。お茶よりコーヒーがいいな」

と、春彦はそれだけ言つて階段の方へ引返そうとした。亮子が慌てて呼びとめた。

「ちょっと……」

「え？」

「お客様って、どなた？」

「藤波葉子っていう人ですよ」

「お幾つぐらいの方？」

「二十五だって言っていました」

「三十一と二十五、年令の釣り合い手頃じゃない」

多美子が口を入れた。春彦は鼻のあたりを手で被った。照れ隠しの仕草だった。

「馬鹿言え、そんなじゃない……」

「今日、六月五日……記念すべき日になるんじゃないかなあ」

多美子の楽しそうな冷やかしだった。

「どこの方かたなの？」

亮子が訊いた。

「うちの会社の親会社、知ってるでしょう。その親会社の社長の娘ですよ」

「じゃあ、藤波物産のお嬢さんなの？」

亮子は驚いたように声をひそめた。

「ええ。じゃあコーヒー頼みます」

春彦はズボンのバンドに両手の親指をかけて、階段を上って行った。

「あの人、藤波物産のお嬢さんなの……」

多美子は母親の背中から放れた。

「道理で、上品なお嬢さんタイプだった」